
機動戦士ガンダムSEED ~ 傭兵少女の介入 ~

ヒートソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED〜傭兵少女の介入〜

【Nコード】

N2608T

【作者名】

ヒートソウル

【あらすじ】

ある一人の少女がガンダムSEEDの世界に来了。彼女はその世界で傭兵として生きていくことに決めた。ある人は彼女を救世主と呼び、またある人は彼女を悪魔と呼んだ。彼女の介入により世界の運命はどう変わっていくのだろうか？

序章（前書き）

ヒートソウルです。今度はガンダムSEED、トリップものを書いてみました。

序章

突然だけど私は別の世界から来た。あの時は驚いたけどそのあとはこの世界がC・Eだコスミック・イラつてことにもっと驚いた。まあ、ガンダムとかのロボットアニメは見ていたけどね。私は廃棄されたコロニーの中にいたの。廃棄されたといっても空気や食糧などはきちんとあったけどね。

この世界に来て今はC・E71年。これからこの世界の戦争が始まる。私はこの世界の戦争に傭兵として介入していくことにした。体は鍛えたし、シュミレーションもしたし、MSは造った。資材はその廃棄されたコロニーの中にあつたし、機体の情報は私の頭の中にあつた。何故あつたかというと私をこの世界に送った神から送られてきた手紙によつて分かつた。私の名前はそこに書いてあつた。その神は私にニュータイプやイノベーターなどの力をつけてくれたみたい。私チートね。あと、チート能力を持つ機体を造つていいとも書いてあつた。GNドライブとかあつたけど。お望み通り造つてあげますよ。

私は現在、造つたMSに乗つて宇宙空間にいる。人つて本当にくだらない理由で戦争するのね。ナチュラルだコーデイネイターだと言ふ本当にくだらない理由でね。私はそんなことは興味ない、人は人なのよ。全く、何でこの世界の人達は分らないのかしら？

まあ、いいわ。私は私のやりたいようにやりますか。でも、ラクス達みたいなの常識なことではない。どんな世界においても絶対的正義は存在しないのだからね。クライン派つて頭大丈夫なのかしらね？

さて、私という介入者によってこの戦争が本来とどう変わるかしら。

「…では、行きましようか、《シグマ》。」

『了解です、イリア。』

私、イリア＝フォードと私のMSのAIは私のMSシグマに乗ってその場所から離れて行った。

序章（後書き）

携帯で投稿しているので遅くなってしまうかもしれませんがよろしく願います。

キャラ設定、機体設定（前書き）

設定です。自分で考えてチートになりました。

キャラ設定、機体設定

イリア「フオード

年齢：15（SEED時）

性別：女

種族：ナチュラル

髪の色、髪型：銀色、ポニーテール

目の色：右、青色　左、金色

趣味：機械いじり、ハッキング、MS改造

能力：ニュータイプ（アムロやティファ以上）、イノベイター（刹那と同等）、S級ジャンパー（A級ジャンパーより上の存在）、飛んでくる銃弾を手で掴める、高い身体能力

備考：神の力によって現実世界からガンダムSEEDの世界に来た少女。ガンダムなどのロボットアニメはたくさん見ていたオタク。基本は物静かな性格で一人にいる方が好き。神によって容姿や名前などが変わってしまったているが、本人は気にいつている。見た目は「機動戦艦ナデシコ」のホシノルリで髪を銀色に、右目を青色にしている。身長はキラより少し低い。出身はオーブになっている。神から原作ブレイクしてOKと言われているのでシンとかは救いたいと思つている。S級ジャンパーとはボソンジャンプのデメリットを無くし、自由にジャンプできるようにしたA級ジャンパーを超え

た存在である。絶対的正義は存在しないと思っている。引き金の重さは分かっている。

機体：ガンダムダブルエックス改

AI：シグマ

装甲：ルナ・チタニウム

システム等：ツインドライブシステム（小型化し同調している）、トランザムシステム、ボソンジャンプ演算システム（小型化）、チユーリップ・クリスタル（使ってもなくならない）、サテライトシステム、エフィールド、ナノスキン

武装：DX専用バスターライフル、ブレストバルカン、ブレストラオンチャー、ハイパービームソード×2、ディフェンスプレート、ソードビット×6（右肩に装備）、ライフルビット×6（左肩に装備）、ツインサテライトキャノン

備考：イリアが作製した機体。元となったダブルエックスをチート強化したもの。イリア本人曰くまだまだ強化できるらしい。ナノスキンを搭載しているので壊れた所は時間が経てば元通りになる。見た目は元となったダブルエックスに右肩にソードビット、左肩にライフルビットを着けたもの。ビット装着状態でもツインサテライトキャノンは使える。ボソンジャンプが出来るためどこでも現れることができる。フリーダムとジャスティスでも勝てない。トランザムシステムを使えばツインサテライトキャノンが使える。AIである

程度の自動操縦ができる。イリア以外が乗ると自爆装置が作動し、数分後に自爆するようになっていて、自爆する前にイリアが乗ると自爆装置が止まる。イリアと乗れば作動しない。

キャラ設定、機体設定（後書き）

後々追加していきます。

第一話（前書き）

第一話です。グダグタになってしまいました。この小説は主人公視点が多いです。

第一話

さて、今私はダブルエックスのコックピットの中にいる。どこに行こうか悩んでいる。このまま進むとヘリオポリスに行くんだけどね、どうしようかしら。

この世界に来て私はいろいろ変わった。本当に私は平和な世界で生きてきたと思つた。傭兵業を始めた時は怖かつた。初めて人を殺した時は手足が震えたり、子供みたくに泣いたり、食べた物を吐いたりもした。本当に私は馬鹿だったわ。安易な気持ちで始めるものじゃないわね。まあ、慣れたから大丈夫だったけど。ちなみに、私が最初にいたコロニーだけどあれはボソンジャンプじゃないと行けない所に置いてきた。つまり、私じゃないと行けないのよ。

話がそれたわね。仕方ない、このままヘリオポリスに行くとしてみますか。

『ボソンジャンプを使いますか？』

「…使わない。ジャンプアウトした所が敵の目の前だったらどうするんですか？」

『そうでした、すいません。』

「…もう少しで着くと思うんだけど、どうやら遅かったようね。」

『そのようです。』

私の目の前には崩壊したヘリオポリスが広がっていた。

『イリア、これからどうしますか？』

「…そうですね、どうしましょうか？ん、あれは？」

『どうしました？』

私が見たものは救命ポッドを抱えたストライクだった。あ、こっちに気づいた。

『だ、誰ですか！あなたはザフトですか?!』

ストライクのキラからの通信ね。

「…私はただの傭兵、イリア＝フォードです。あなたは？」

『ぼ、僕はキラ＝ヤマトです。あなたは何故ここに？』

「…補給でここに来ました。あなたは何故ここに？」

『ここで戦闘がありました、連合の船に戻ろうとしたらこの救命ポッドを拾ったんです。』

「…あなたは連合の所属ですか？」

『今は訳あって居るだけです。あの、補給が必要でしたら着いて来て下さい。マリューさん達には僕から言っておきますから。』

「…ありがとうございます。」

私はストライクの後を着いて行った。しかし、アークエンジェルって変な形ね。キラが救命ポッドやら私のことで誰かと話している。

『あの、イリアさんでしたっけ？危害を加えないなら大丈夫みたいです。』

「…ありがとうございます。あと、呼び捨てで構いませんよ。」

『じゃあ、僕も呼び捨てで構いませんよ。』

私はストライクに連れられてアークエンジェルの中に入った。なんか、避難してきた人やストライク、そして私のダブルエックスなどでごった返しているわね。ダブルエックスの回りを銃を構えた兵士が囲んだ。まあ、見たことない機体が現れたら警戒するわよね。私はダブルエックスのコックピットから出た。だか警戒は解かない。

「私は地球連合軍所属のナタル＝バジール少尉だ。君の名前や所属、あの機体について話してもらおう。」

兵士の間からバジール少尉が出てきた。

「…私は傭兵、名前はイリア＝フォード、あの機体は私が造った機体です。」

私がそう言ったら驚いていた。

「そ、そうか。」

「…どうですか、今は仕事は受けてないから私を雇ってみますか？」

「す、少し待ってくれ。そのようなことは艦長と聞かなければ分からない。」

「おい、その嬢ちゃん！嬢ちゃんの機体を動かしてくれ！」

バジール少尉が困っていたらマードック軍曹から声をかけられた。あ、ハンガーに入れていなかったわね。

「…《シグマ》、お願いします。」

『分かりました。』

私がそう言うと、ダブルエックスが動いてハンガーに入り固定された。

「MSが勝手に動いた！つてかしゃべった！」

「…私のMSには自立AIが入っています。名前はシグマ。それと私のダブルエックスは調べないで下さい。私以外がコックピットに入ると数分後に自爆しますから。」

「だ、ダブルエックス？」

「…私のMSの名前です。あの、そろそろ艦長さんと話したいのですが。」

「わ、分かった。着いて来て貰おう。」

私はバジール少尉に連れられてアーケエンジェルの艦長の所に行

った。

私はバジール少尉に連れられてアークエンジェルの艦長のラミアス少尉とフラガ大尉の所に来た。そして話をして私を傭兵として雇ってくれた。私とダブルエックスの事を上に報告しないことと調べないことを条件にした。私以外の人がダブルエックスに乗ると自爆するって笑顔で言ったら三人の顔がひきつっていたけど。

話が終わってダブルエックスの所に戻ろうとしたらアラートが鳴った。ラミアス艦長に言われて私は格納庫に向かった。フラガ大尉から作戦を聞いた。その後、ダブルエックスのコックピットに入って準備していたら通信が入って来た。

『あの、イリアさん。私はミリアリアハウです。これからアークエンジェルのCICを担当します。よろしくお願いしますね。』

「…こちらこそよろしくお願いします。後、敬語はいりませんよ。」

『はい。よろしくね。』

『イリア、君は大丈夫なの？』

「…キラですか。ご心配なく。」

『分かった、気をつけて。』

『嬢ちゃん、作戦は分かっているな。頼むぞ！』

「…頼まれました。」

『キラ＝ヤマト、ガンダム行きます!』

『ムウ＝ラ＝フラガ、出る!』

キラのストライクとフラガ大尉のメビウス・ゼロがアーケエンジンから発進した。私も行きますか。

『進路クリア。ダブルエックス発進どうぞ!』

「…イリア＝フォード、ダブルエックス発進します。」

私はそう言って出撃した。さて、Xナンバーの性能見せてもらおうよ。

第二話（前書き）

第二話です。グダグダです。

第二話

出撃した私を待っていたのはブリッツとバスターだった。フラガ大尉の言った作戦とは、キラと私がXナンバー四機を足止めし、その間にフラガ大尉がヴェサリウスに奇襲を仕掛けるという作戦。キラはすでにイージスとデュエルと戦っている。

『なんだこいつは!?!』

『ディアツカ、知らない機体です。気をつけて!』

その通信が聞こえ、二機がビームライフルで牽制してきた。私は回避せず、エフィールドでビームを消した。

『ビ、ビームが効かない!?!』

『ま、まじかよ!』

驚いているわね。最新兵器が効かないなんて思ってもいなかったのね。私は動きながら二機に向かってバスターライフルを放った。

『11の、落ちろよ!』

ビームが効かないと分かったのかバスターはガンランチャーを撃ってきて、ブリッツは接近してきた。

「…行って下さい、ライフルビット。」

私はライフルビット六機をバスターに向かわせ、ハイパービームソ

ードを抜き、接近してきたブリッツの左腕の肘から下を切断した。バスターは動きの早いライフルビットに苦戦している。

『うわぁー！』

『くそっ！ちょこまかと。』

バスターは中・遠距離戦タイプだから動きが遅いわね。ライフルビットで充分。

『イリア、ブリッツの反応が消えました。』

私がライフルビットの操作に集中しているとシグマが言ってきた。周りを見るとブリッツが消えていた。

「…ミラージュコロイド。ですが、そこです。」

私は虚空に向けてバスターライフルを放った。

『くっ！何で！』

ミラージュコロイドは肉眼でもレーダーでも見えない。でも私なら分かる。撃った方向にブリッツがシールドを構えて姿を現した。その後、私は二機を少しずつ追い詰めて行った。

『しまった！エネルギーが！』

その声を聞いてストライクを見ると色が青、赤、白のトリコロールからグレーに変わっていた。フェイスソフトダウンしたのね。私はライフルビットを戻し、手負いのブリッツとバスターを置いてキラ

の所に向かった。イージスがストライクに近づいてくるが私は牽制してストライクの前に来た。

「…キラ、大丈夫ですか？」

『イリア、ストライクのエネルギーが！』

「…ならば早く装備を換装して下さい。この二機は私が押さえおきます。」

『あ、ありがとう！』

ストライクはアークエンジェルに向かった。さてと、

『待つてくれキラ！』

『貴様、邪魔をするな！』

イージスとデュエルが私を置いてストライクに向かおうとするがさせない。私は二機をバスターライフルで攻撃した。ていうかアスランうるさいわね。

『このナチュラル風情が！』

イージスとデュエルがビームライフルで攻撃してきたがエフィールドによって霧散した。

『何、ビームが！？』

『イザーク気をつけて！その機体にビームは効きません！』

『何だと!』

『くっ!キラ!』

全く、私とブリッツとバスターの戦いを見てなかったのかしら?あとアスラン、さっきからキラばかり、大丈夫なの?

『落ちろ!』

不味い、バスターがストライクを狙っている。

「:行つて下さい。ソードビット。」

ソードビットをストライクに向かわせて、ストライクとバスターを結ぶ直線上にソードビットをバリア状に展開し、バスターの超高インパルス狙撃ライフルを防いだ。

『な、またこいつらか!』

私のソードビットがバスターの攻撃を押さえている間にストライクがエールからランチャーに装備を換装した。そしてアグニを構えて乱射した。

『くそっ!』

『イザーク、引きましよう!このままではこちらが不利です!』

その会話を聞いた時、ヴェサリウスから信号弾が放たれた。作戦が成功したのね。信号弾を見てメナンバー四機が撤退して行った。私

はソードビットを戻した。

『坊主、嬢ちゃん！大丈夫か！』

「…フラガ大尉、御苦労様です。」

『ぼ、僕は大丈夫です！』

「…キラ。」

『イリア、どうしたの？』

「…無理しないで下さいね。」

『うん。』

『二人とも、戻るぞ！』

『は、はい！』

「…了解しました。」

私達三人はアークエンジェルに戻った。Xナンバーの一機くらいは捕まえておきたかったと私は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2608t/>

機動戦士ガンダムSEED～傭兵少女の介入～

2011年6月9日17時42分発行